

主張

第30回日本

医学会総会は

4月27日より

名古屋で開か

れ、「医学と医

療の深化と広がり

健康

長寿社会の実現をめざし

て」をメインテーマとし、

中部8県の医科大学と

県医師会がその準備

を行った。人生1

00年時代の到来

と言われる中、健康

問題に関する国民

の関心は高まっている。

2025年、団

塊の世代が後期高齢者

(75歳以上)となり、医

療給付費と介護給付費

と合わせて、70兆円を超

えると試算されている。

健康長寿社会の形成に

向けて、世界に誇るわが

国の国民皆保険制度をど

う維持していくか、介護

保険制度をどう構築して

いくか大問題である。ま

た人生最期における医療

の在り方について、緩和

医療、在宅医療、チーム

医療、予防医療、生活支

援、健康増進、患者生活

動、ボランティア活動と

いったさまざまの視点か

鎖の中で死を迎える。疾

患を問わず、可能なかぎ

り軌道を見極め、病態・

苦痛・機能の三つの視点

のバランスを取りながら

全人的なケアを提供でき

る緩和ケア総合医が必要

とされている。

健康長寿の延伸に向

と密接に関わることが明

らかになり、当協会でも

これを推し進めている。

日医は「日医かかりつ

け医機能研修制度」を2

016年度より開始した。

超高齢社会において、生

命健康や地域社会を守る

ために「かかりつけ医

く人は住み慣れた場所

で、支えに気付き穏やか

に過ごせること、臨終期

を朗らかに笑顔で迎えら

れることを、患者・国民

や医療・介護職が理解

し、実践するための地域

の醸成が重要である。

死の質を高めるため

に、本人や家族と一

緒に医療・ケアに携

わる者が本人の希望

がかなうように、生

き方、死に方、看取

りの在り方、場所な

ど話し合うことが、

「なんともめでたい臨

終」を迎える鍵となる。

死を見つめることで、改

めてみずからの命を生き

きる希望が湧いてくる。

保険医協会も超高齢

社会にふさわしい施策を

提起し住民と共に運動し

ていかねばならぬ。

超高齢社会への対策 (日本医学会総会より学ぶ)

ら医療者と一般市民が共

に知恵を絞る必要がある。

超高齢社会を迎えたわ

が国では、死亡のピーク

は男性87歳、女性92歳と

なっている。超高齢者の

多くは単一疾患の軌道で

はなく、複数の病と複数

の障害、不全の複雑な速

けて口腔の健康も大切で

ある。周術期の口腔機能

管理の徹底により在院日

数が減ること、歯周病と

糖尿病の関係、脳血管疾

患発症の関係、咀嚼と認

知症の関係が注目され、

国民的な理解も深まり、

口腔の健康が全身の健康

が中心となって、地域包

括ケアシステムの推進に

より、医療・介護連携を

中心とした「まちづくり」

を行うとともに、今後は

医師・歯科医師が予防に

力を入れていくことが大

切である。

死は医療の敗北ではな